

親鸞における人間観

三木 彰 円

人間が本願の機としてあるということは、人間にいかなることを提起しているのであろうか。人間の存在を問うことは、もとより私という具体的事実^に立たない限りは、問うという営み自体が無化される質のものであるが、そこに問われる人間の存在は「私」を主とすることにより客体とされるべきものではない。人間とは何かと問うことが、人間内関心に立つて自他を位置付け^た客を分かつものであるならば、そこでなされるのは人間の抽象化に他ならず、それによつては人間であることの事実^は明らかになつていかなのであろう。親鸞は人間の存在を「われ」という「一人」の成就と「われら」という一切性において確認していく。各別性においてある人間は、あくまでも「われ」と名乗る「一人」を成就することを課題的に生きているのだが、それは同時に「われら」においてある「われ」の確認を必須することでもある。すなわち「我一心」と、本願に目覚めることにおいてある「我」とは「わが身」(尊号銘文)と云われるように、自身の現存事実の内容を「われら」としてあることと領くのである。この「我」の名乗りとは、「汝」(愚秃鈔)と喚ぶ本願によつて、始めて客体として明らか^にされる「我」であると同時に、その「汝」という喚びかけは、十方一切の衆生の「皆・同・斉」(行巻)という平等性を確認するところに喚びかけられていくものとして確かめられていくことであるが、そこに、「われ」を「われら」としてある

「われ」と領くことも、由来していくのである。

この親鸞の確認は「信巻」三一問答に看取することができる。その第一問答には、「わが身」に成就する一心は「如来清淨願心の回向成就」の信であることが、三心の字訓に關わられていくのであり、そこに「大悲回向の心」が確かめられる時、一心が「涅槃の真因」「疑蓋無間雜」の信樂・眞実信心と明らかになるのである。その帰結からさらに「又問」と展開される第二問答に、「我」に一心として成就する三心が、「設我得仏十方衆生」と「已に三心の願を發したまえ」る事実^に推せられるのである。それはあくまでも仏意の難測性の確認に基く問であり、そこに「竊推斯心一切群生海」と、十方衆生の事実^が三心の願を已発する如來の清淨・眞心なる「行菩薩行時」により照破せられるのである。「我」に成就する一心の確認から、さらに三心を誓願する如來願心に「已に」發見された衆生性の確認ということが、二つの問答の展開として確かめられているのである。すなわち人間を問ひ、存在を問うということも、本願の「已發」ということを、その基点とする^{こと}において成立するのであり、親鸞の「われ・われら」という人間観も、このことにおいて確かめられているのである。

人間の存在を問う基点としての、この本願の「已發」とは、信において人間に課題的に提起されることであるが、この信が課題的にあることを、親鸞は「獲得信樂發起自來選摂願心開闢真心顯彰從大聖矜哀善巧」(別序)と^いい切つてゐる。弥陀釈迦二尊とは、「信樂を獲得すること」のうちに明確化されることであるがゆえに、それはまた人間の存在を明らか^ににする「已發」という基点の意味を、さらに人間に明確化する二つの軸である^{こと}と言える。その時確認される人間の存在の課題性とは、行の不明性と存在自

体の不明性という視点によって確かめることができるであろう。

親鸞は「教巻」に顕真実教を「大無量寿経」と掲げ、その大意を確かめている。そこでは弥陀は「超発於誓致哀凡小選施功德之宝」と位置付けられるが、この超発と選施により衆生に与えられたことが「言発願回向者如来已発願回施衆生之心也・言即是其行者選・択本願是也」(行巻)と親鸞が明らかにする。「至徳の尊号」南無阿弥陀仏なのであり、それがさらに「非凡聖自力之行・不回向之行」と確かめられていく。この「不回向之行」という言葉に人間が行修性においてあることが提起されていると言える。人間は定散二善と言われることが多く、行為をもつて人間の解決を図らんとするが、人間が流転することもそのことに由るのである。人間における行に本質的事柄として確かめられなければならないことこそ、人間の回向心の無清浄・無真実という質なのであり、「不回向之行」とはそれを明白にする一言なのである。

しかしこの阿弥陀の事実が衆生に明らかになることは、釈尊をまたなければならぬ。ここに釈迦を「出興於世欲拯群萌惠以真実之利」と確かめる親鸞の視点もある。釈尊は「唯説本願」を「所以」として出世し、そこに「説本願」を宗旨とし「仏名号」を体とする。「大経」が衆生に公開されるのであり、その釈尊をして「説本願」を出世の「所以」とせしめたことこそ、「無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう」如来たる釈尊が発見した、拯うべき群萌としての衆生の存在なのである。したがって「出世の大実」の得知とは、人間存在が確認される基点を得知することであり、釈尊の出世において、人間が「煩惱具足のわれら」(歎異抄)と決定されてあることを領くことなのである。

このような確認のもとに、親鸞は「帰命はすなわち釈迦弥陀の

二尊の勅命にしたがいて、めしにかなう」(尊号銘文)と言う。そこには人間が「したがう」ことによって、何事かを明らかにするべく問う存在としてあること、言うならば人間が「弟子」性をもってあることを確認していくのであり、人間は「弟子」性においてあるがゆえに、そこに何に依り何を問うていくのかということが明らかにされなければならないのである。この「したがう」ということは、人間の内なるものへの従属を言うのではなく、「二尊の勅命・めしにかなう」と言われるように、「帰命」という一事において、人間が「汝・行者」(愚禿鈔)と喚びかける本願に問われてある事実を明らかにすることであり、人間それ自身が課題性としてあることを明らかにしていくことである。

本願の名号において、「我帰命」(行巻)と表白する身として、「汝」と喚びさまされるところに人間における課題があるのであり、その表白とは、十方衆生を喚ぶ選択本願に根拠することであるがゆえに、その「我」「一人」に明らかになる人間とは、「一切往生人」(信巻)すなわち一切として往生人たるべくあることを、その領きとして確かめていくのである。このことを明らかにする時、親鸞は「大小聖人重軽惡人皆同齊心帰選択大宝海念仏成仏」(行巻)と敬白するのであり、そのように人間が確かめられる時、すなわち「浄邦の縁」を「浄業の機」(総序)として生きる人間の全体に、「帰命」という一事が位置付けられていくのである。

親鸞が第十八願の「唯除」に、深く喚びかける本願の悲心聞きとることにより確認する第十九願第二十願の課題も、そのような本願における人間確認に立脚することによってのみ尋ねられることであると言えよう。